

# 小学校学級担任の学級運営等に関連する Daily Hassles 測定尺度の開発

安藤きよみ\* 中島望\*\* 鄭英祚\*\* 中嶋和夫\*\*\*

**要旨** 本研究は、小学校学級担任を対象に、学級運営等に関連する Daily Hassles（日常苛立ち事）を測定する尺度の開発を目的とした。A 県の公立小学校 50 校の通常学級担任 663 名を対象に、質問紙調査を実施した。項目反応理論を用いた内容的妥当性の検討、構造方程式モデリングによる因子構造ならびに外的基準との関係での構成概念妥当性の検討、並びに内的整合性に着目した信頼性の検討を行った。その結果、最終的に選定した児童関連 Hassles 9 項目、保護者関連 Hassles 4 項目で構成された小学校学級担任の「職務関連 Daily Hassles 測定尺度」（経験頻度・ストレス強度）の構成概念妥当性と信頼性は統計学的に支持された。本研究の結果は、今後の教員のストレスと教員自身が持つ内的・外的資源との関連性の検討やストレス更には精神的健康の悪化を防ぐための支援・予防策の検討にとって有意義な基礎資料となることが示唆された。

**キーワード** 学級担任、ストレス、メンタルヘルス、構造方程式モデリング、項目反応理論

## I. 緒言

文部科学省の統計によると、公立学校教員の精神疾患による病気休職者の数は、平成 14 年に精神疾患以外の病気休職者数を上回り（2,687 人）、その後も増加し、平成 22 年には 5,407 人に達している<sup>1)</sup>。平成 22 年度の精神疾患の有病者数を学校種別にみると、小学校教員が 2,346 人と最も多い<sup>1)</sup>。前記報告書によれば、教員の「仕事や職業生活におけるストレスの有無」については、ストレスが有ると回答した者は 67.6% に達し、そのストレス源の内訳は「仕事の量の問題」が 60.8%、「仕事の質の問題」が 41.3% となっており、一般企業労働者よりも高い数値となっている<sup>1)</sup>。文部科学省は平成 24 年 8 月、「教職員のメンタルヘルス対策」に関する見解の中で、教職員の精神疾患の背景に関しては、メンタルヘルス不調を訴えて受診する者の多くは生徒指導に関してストレスを感じていると述べている<sup>2)</sup>。また職場内の人間関係に関連するストレスや生徒指導でストレスを感じている教員は、保護者対応においてもストレスを感じるケースが多いとされている<sup>2)</sup>。他方、平成 20 年度に実施された「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」では、

暴力行為の発生件数が 3 年連続で増加しており、小・中学校においては、調査開始以来過去最高の件数となっている<sup>3)</sup>。このような対教師、生徒間の暴力や器物損壊などの増加は、教員のストレスを増幅させることが容易に想像でき、教員のメンタルヘルス対策が急がれるものと推察される。

従来の小・中学校の教員のストレスに関する研究を概観すると<sup>4)5)</sup>、ストレス（およびストレッサー）の内容は、大きくふたつに分けることができる。ひとつは、職務自体およびそれに付随するものであり、生徒指導上の困難や生徒・保護者との関係性の難しさである。もうひとつは、職場（上司・同僚）の人間関係、自身の信条と現実のギャップなどのジレンマ、多忙・心理的忙殺である。後者は、教員以外の職種でもたびたび問題とされるところであるが、前者は、とりわけ教員に特徴的にみられる困難であり、また前述したように、近年の生徒自体の特性の変化により、また保護者や地域住民への対応が増えたことにも関連し<sup>16)</sup>、今後さらに増大する恐れがある。このことに関連し、それらのストレスを軽減するために何が有効かが検討されている<sup>12,17-20)</sup>。しかしそれら従来の研究に共通した改善すべき課

\*川崎医療福祉大学医療福祉学部医療福祉学科

〒701-0193 岡山県倉敷市松島288

\*\*岡山県立大学大学院保健福祉学研究科博士後期課程

〒719-1197 岡山県総社市窪木111

\*\*\*岡山県立大学保健福祉学部保健福祉学科

題として、ストレスに関連した測定尺度の妥当性と信頼性の問題が指摘できる。加えて測定項目も、ストレスとストレスが混在しており、理論的な位置づけを明確にした上での尺度項目の精選が強く望まれる。小・中学校では同じ義務教育でも、小学校は一般的に学級担任制をとっているため、より教員(担任)に多くの負担がかかるものと推察でき、有効な支援策の検討は重要な課題であり、その基礎的な資料となる測定尺度の吟味は喫緊の研究課題と言えよう。

そこで本研究では、教員のメンタルヘルス向上に役立つ資源の検討を視野に入れつつ、小学校の学級担任が学級運営等に関連して経験する日常苛立ち事(Daily Hassles: ストレスの素因となる出来事)を測定する尺度の開発を目的とした。

## II. 方法

### (1) 調査対象

本研究では、尺度の開発を志向し、A県の公立小学校50校の学級担任663名(特別支援学級を除く)を対象に、無記名自記式の質問紙調査を実施した。調査に際しては、各小学校の所属長に調査の趣旨、倫理的配慮について説明し、調査協力に関する同意が得られた場合に限り、当該学校の通常学級担任への調査票(および調査の趣旨・倫理的配慮に関する書面)の配布を依頼した。調査票への回答・提出をもって調査協力に同意したものとし、回答後の調査票は封筒に密封して、各学校の所属長に提出してもらい、後日著者が回収した(留め置き法)。調査期間は2012年2月の約1ヶ月間であった。調査にあたり、岡山県立大学設置の倫理委員会の承認を得ている。

### (2) 調査内容

調査内容は、小学校の学級担任(以下、教員と称す)の基本属性(性別、年齢、職位、担任学年、現任校着任後期間、教職期間、担任学級の児童数、担任学年の学級数、全校の学級数、学校の所在地域)、教員の学級運営等に関連して経験するDaily Hassles(以下、職務関連Daily Hasslesとする)、精神的健康(GHQ-12)で構成した。

教員の職務関連Daily Hasslesは、独自に項目を準備して測定した。まず、教員の職務関連Daily Hasslesを「学級運営等の中核である教科等の指導場面における児童の問題行動とそれに関連する保護

者との連携において派生する困難」と定義した。またその構成要素は、学級がうまく機能しない状況を念頭に置いた「児童関連Hassles」、モンスターペアレントに代表される「保護者関連Hassles」の二つとした。以上の定義・構成要素に基づき、先行研究<sup>10,12,15</sup>・著者の経験知・現職小学校学級担任へのヒアリングにより検討を重ね、「児童関連Hassles」16項目、「保護者関連Hassles」6項目の計22の質問項目を作成した。各質問項目に対する回答と得点化は、まずHasslesの経験頻度について「0点: 全くなかった」～「3点: よくあった」の4件法で回答を求め、次にそれに対応するストレス強度を「0点: 全く苦痛・いやでなかった」～「3点: とても苦痛・いやで疲弊した」の4件法で回答を求めた。得点が高いほど、経験頻度が高く、またストレスを強く感じていることを意味するよう設定した。なお、経験頻度で「0点: 全くなかった」と回答した者については、ストレス強度を「0点: 全く苦痛・いやでなかった」ものとして処理した。

精神的健康は、福西(1990)が日本語訳した英国版GHQ-12を用いて測定した<sup>21</sup>。得点化には、GHQ採点法(回答肢の左から0-0-1-1点を与える)を用いた。

### (3) 分析方法

統計解析では、まず、測定尺度の妥当性と信頼性の検討を行った。妥当性については、尺度の因子構造モデルの側面から見た構成概念妥当性について、構造方程式モデリングを用いて検討を行った。信頼性については、内的整合性に着目し、クロンバックの $\alpha$ 信頼性係数ならびにKR-20信頼性係数を算出して検討した。なお、構成概念妥当性を検討する前に、著者らで準備した項目群が、ある概念の程度を測定するのにふさわしい項目であるかどうかを検討するために、項目反応理論により項目選定を行うこととした。具体的には、ある一つの要素に関わる項目群について、修正済み項目合計相関(Corrected Item-Total Correlation: CITC)を算出し、要素との関連性が低い項目(CITCが0.3未満)があれば除外したのち、項目群が一因子モデルとして仮定できるかどうか、寄与率を算出して確認した<sup>22</sup>。次いで、項目反応理論により識別力と困難度を算出し、識別力は0.75を下回る項目を、困難度は絶対値4.0を上回る項目を削除することとした<sup>23</sup>。さらに、困難度が類似している項目組については、識別力が高

表 1. 対象者の属性等

性別	男性	177 ( 34.3 )
	女性	339 ( 65.7 )
職位	講師	50 ( 9.7 )
	教諭	466 ( 90.3 )
担任学年	1年	89 ( 17.2 )
	2年	86 ( 16.7 )
	3年	79 ( 15.3 )
	4年	90 ( 17.4 )
	5年	81 ( 15.7 )
	6年	91 ( 17.6 )
年齢	平均40.1歳 (標準偏差10.4、範囲22~60歳)	
現任校着任後期間	平均38.1ヵ月 (標準偏差23.7、範囲4~106ヵ月)	
教職期間	平均203.5ヵ月 (標準偏差126.5、範囲7~455ヵ月)	
担任学級児童数	男子平均15.3人、女子平均14.4人	
担任学年学級数	平均2.8学級 (標準偏差1.3、範囲1~6学級)	
全校学級数	6学級以下	13 ( 26.0 )
	7~12学級	20 ( 40.0 )
	13学級以上	17 ( 34.0 )
学校所在地域	都市部	25 ( 50.0 )
	それ以外	25 ( 50.0 )

単位: 上表-人(%), 下表-校(%)

い項目のみを採用することとした。以上の項目反応理論のパラメータの算出は、ストレス強度のデータを用いて行った（なぜなら、苛立ち事は経験することではなく、それが積み重なりストレスとなることで健康に重大な影響を及ぼすからである）。項目パラメータの推定には、EasyEstGRMによる周辺最尤法を用いた<sup>24)</sup>。

以上の分析を基礎に、教員の職務関連 Daily Hassles の経験頻度がそれに対応するストレス強度に影響し、さらにストレス強度が精神的健康に影響するといった因果関係モデルのデータに対する適合性と、変数間の関連性について検討した。なお関連性を詳細に検討するために、従来の研究においてストレスサー・ストレス反応等との関連性が指摘されている<sup>1,8,10,13,25,26)</sup>、教員の「性別」「年齢」「教職期間」「現任校着任後期間」「担任学年」「全校の学級数」を統制変数としてモデルに位置づけた。

前記の因子構造モデルおよび因果関係モデルのデータに対する適合性は、CFIとRMSEAにより判断した。一般的に、CFIは0.9以上、RMSEAは0.08以下であればそのモデルは妥当であると判断

される<sup>27,28)</sup>。パラメータの有意性は、非標準化係数を標準誤差で除した値の絶対値が1.96以上（5%有意水準）を示したものを統計学的に有意と判断した。また推定法は、重み付け最小二乗法（WLSMV estimation）を用いた。

以上の解析には、所蔵のSPSS12.0J、項目反応理論のフリーソフト EasyEstGRM Ver.0.4.1<sup>24)</sup>、Mplus version 2.01を用いた。なお本研究では、回収された567人（回収率85.5%）の調査票のうち、統計解析に投入する変数に欠損値の無い516人を集計対象とした。

### Ⅲ. 結果

#### (1) 対象者の属性等 (表1)

対象者である教員は、男性が177人（34.3%）、女性が339人（65.7%）と女性が多く、平均年齢は40.1歳（標準偏差10.4）であった。職位は講師が50人（9.7%）、教諭が466人（90.3%）と大半が教諭であった。担任学年は、いずれの学年も15.3~17.7%と大きな偏りはみられなかった。現任校着年後期間は、平均38.1ヵ月（標準偏差23.7）、教職期

間は平均 203.5 ヶ月（標準偏差 126.5）であった。担任学級の児童数は、男子が 15.3 人と、女子の 14.4 人に比べやや多かった。担任学年の学級数は、平均 2.8 学級（標準偏差 1.3）であった。全校の学級数は 7～12 学級の学校が 20 校（40.0%）、13 学級以上の学校が 17 校（34.0%）と、中規模から大規模な学校がやや多かった。なお学校の所在地域は、都市部とそれ以外が半々であった。

## (2) 教員の職務関連 Daily Hassles 測定項目の検討 (表 2～4)

教員の職務関連 Daily Hassles についての回答傾向は、まず経験頻度の回答「よくあった」「時々あった」に着目すると、「児童関連 Hassles」では「2. 授業中、児童が私語をする」で 245 人（47.5%）、「3. 授業中、児童が教科書を見るべき時に見なかったり、ノートに書くべき時に書かなかったりする」で 211 人（40.9%）、「保護者関連 Hassles」では「6. 家庭の状況にまで、教師は入り込めない」で 165 人（32.0%）と多くなっていた。次にストレス強度の項目平均値が高かったもの（1.0 以上）をみると、「児童関連 Hassles」では「2. 授業中、児童が私語をする」（平均 1.1）、「保護者関連 Hassles」では「1. 保護者と話をしても噛み合わないことがある」（平均 1.0）となっていた。職務関連 Daily

Hassles の項目選定のために、ストレス強度の項目について、項目反応理論による検討を行った。まず CITC（修正済み項目合計相関）を算出したところ、「児童関連 Hassles」においては、「9. 学校への登校を渋る児童がいる」で 0.257 と低値であったため、この項目を削除することとした（「保護者関連 Hassles」では低値の項目はなかった）。各要素の一次元性の検討のためにスクリープロットをみたところ、第一因子の寄与率は「児童関連 Hassles」で 56.1%、「保護者関連 Hassles」で 61.6% と一次元性の基準を満たしていた。次に項目反応理論により識別力と困難度を算出した結果、「児童関連 Hassles」では、識別力が 0.75 未満である 2 項目（「13. 学級の特定の児童の学用品や持参物・くつ等がなくなったり、いたずら書きがあったりする」「15. 気の合う友達とだけでグループ化し、グループ間の対立をまねいている」）を削除した。困難度が絶対値 4.0 を上回る項目はなかったが、困難度が類似している「5. 授業中、児童が挙手しなかったり、うなずかなかつたりと、教師の問いに反応しない」「10. 児童から授業が分からない、楽しくないと言われる」（対応する項目「7. 教師に対して、暴言や暴力をはたらく児童がいる」）、「8. 常に個別対応の必要な児童がいて、一人では対応できない」（対応する項目「6. 始業の

表 2 教員の職務関連 Daily Hassles 測定項目に対する回答状況

教員の職務関連 Daily Hassles 測定項目	経験頻度				ストレス強度 平均値 (SD)
	全くなかった	たまにあった	時々あった	よくあった	
「児童関連 Hassles」					
1. 授業中、児童が教室外に出て行く	411 ( 79.7 )	63 ( 12.2 )	29 ( 5.6 )	13 ( 2.5 )	0.3 (0.8)
2. 授業中、児童が私語をする	53 ( 10.3 )	218 ( 42.2 )	126 ( 24.4 )	119 ( 23.1 )	1.1 (0.8)
3. 授業中、児童が教科書を見るべき時に見なかったり、ノートに書くべき時に書かなかったりする	94 ( 18.2 )	211 ( 40.9 )	132 ( 25.6 )	79 ( 15.3 )	0.9 (0.8)
4. 授業中、児童が机にうつ伏して寝る	343 ( 66.5 )	143 ( 27.7 )	21 ( 4.1 )	9 ( 1.7 )	0.3 (0.6)
5. 授業中、児童が挙手しなかったり、うなずかなかつたりと、教師の問いに反応しない	244 ( 47.3 )	164 ( 31.8 )	76 ( 14.7 )	32 ( 6.2 )	0.6 (0.8)
6. 始業の時間に着席できないなど、時間を守らない児童がいる	190 ( 36.8 )	211 ( 40.9 )	56 ( 10.9 )	59 ( 11.4 )	0.8 (0.9)
7. 教師に対して、暴言や暴力をはたらく児童がいる	412 ( 79.8 )	68 ( 13.2 )	23 ( 4.5 )	13 ( 2.5 )	0.4 (0.8)
8. 常に個別対応の必要な児童がいて、一人では対応できない	239 ( 46.3 )	106 ( 20.5 )	68 ( 13.2 )	103 ( 20.0 )	0.8 (1.0)
9. 学校への登校を渋る児童がいる	263 ( 51.0 )	146 ( 28.3 )	32 ( 6.2 )	75 ( 14.5 )	0.7 (0.9)
10. 児童から授業が分からない、楽しくないと言われる	264 ( 51.2 )	221 ( 42.8 )	27 ( 5.2 )	4 ( 0.8 )	0.6 (0.8)
11. 学級の児童が、(自分の)思い通りにいかないときに、児童同士で殴り合いのけんかをする	305 ( 59.1 )	156 ( 30.2 )	31 ( 6.0 )	24 ( 4.7 )	0.5 (0.9)
12. 学級に悪ふざけやいたずらを面白がる雰囲気がある	242 ( 46.9 )	204 ( 39.5 )	43 ( 8.3 )	27 ( 5.2 )	0.9 (1.0)
13. 学級の特定の児童の学用品や持参物・くつ等がなくなったり、いたずら書きがあったりする	389 ( 75.4 )	111 ( 21.5 )	14 ( 2.7 )	2 ( 0.4 )	0.5 (0.9)
14. 1～2名の落ち着きのない児童に周りの児童が誘発される	234 ( 45.3 )	161 ( 31.2 )	57 ( 11.0 )	64 ( 12.4 )	0.9 (1.0)
15. 気の合う友達とだけでグループ化し、グループ間の対立や孤立をまねいている	329 ( 63.8 )	122 ( 23.6 )	38 ( 7.4 )	27 ( 5.2 )	0.5 (0.9)
16. 児童が当番活動(給食・掃除・係活動など)を真面目にしない	283 ( 54.8 )	166 ( 32.2 )	51 ( 9.9 )	16 ( 3.1 )	0.6 (0.8)
「保護者関連 Hassles」					
1. 保護者と話をしても噛み合わないことがある	152 ( 29.5 )	255 ( 49.4 )	82 ( 15.9 )	27 ( 5.2 )	1.0 (1.0)
2. 保護者は子どもの生活面(生活リズムや衣食住に関すること)に対して無関心または非協力的である	161 ( 31.2 )	236 ( 45.7 )	97 ( 18.8 )	22 ( 4.3 )	0.9 (0.9)
3. 保護者から子どものことをもっと分かってほしいと言われる	344 ( 66.7 )	144 ( 27.9 )	21 ( 4.1 )	7 ( 1.4 )	0.5 (0.8)
4. 保護者が過保護で、子どもが依存し過ぎて、子どもの自立を妨げている	251 ( 48.6 )	185 ( 35.9 )	54 ( 10.5 )	26 ( 5.0 )	0.6 (0.8)
5. 保護者との関係を重視するあまり、伝えたいことが的確に伝えられない	221 ( 42.8 )	203 ( 39.3 )	67 ( 13.0 )	25 ( 4.8 )	0.8 (0.9)
6. 家庭の状況にまで、教師は入り込めない	137 ( 26.6 )	214 ( 41.5 )	99 ( 19.2 )	66 ( 12.8 )	0.8 (0.8)

経験頻度の単位: 人(%), SD: 標準偏差

表3 教員の職務関連Daily Hassles測定項目の識別力と困難度

	識別力	困難度1	困難度2	困難度3
教員の職務関連Daily Hassles(ストレス強度)				
「児童関連Hassles」				
* 1.授業中、児童が教室外に出て行く	0.955	1.229	1.821	2.691
* 2.授業中、児童が私語をする	1.834	-0.811	0.661	1.733
* 3.授業中、児童が教科書を見るべき時に見なかったり、ノートに書くべき時に書かなかったりする	1.605	-0.514	1.003	1.932
* 4.授業中、児童が机にうつ伏して寝る	0.993	0.909	2.204	3.509
5.授業中、児童が挙手しなかったり、うなずかなかつたりと、教師の問いに反応しない	0.887	0.117	1.562	3.008
* 6.始業の時間に着席できないなど、時間を守らない児童がいる	1.453	-0.155	1.062	2.150
* 7.教師に対して、暴言や暴力をはたらく児童がいる	1.223	1.136	1.452	2.117
8.常に個別対応の必要な児童がいて、一人では対応できない	0.946	0.082	1.048	2.043
9.学校への登校を渋る児童がいる				
10.児童から授業が分からない、楽しくないとされる	0.865	0.301	1.599	2.903
* 11.学級の児童が、(自分の)思い通りにいかないときに、児童同士で殴り合いのけんかをする	0.985	0.546	1.484	2.301
* 12.学級に悪ふざけやいたずらを面白がる雰囲気がある	1.735	0.036	0.680	1.553
13.学級の特定の児童の学用品や持参物・くつ等がなくなったり、いたずら書きがあつたりする	0.624	1.315	1.745	2.783
14.1~2名の落ち着きのない児童に周りの児童が誘発される	1.671	-0.038	0.647	1.452
15.気の合う友達とだけでグループ化し、グループ間の対立や孤立をまねいている	0.669	0.840	1.816	3.019
* 16.児童が当番活動(給食・掃除・係活動など)を真面目にしない	1.375	0.277	1.262	2.162
「保護者関連Hassles」				
* 1.保護者と話をしても噛み合わないことがある	1.500	-0.459	0.709	1.488
2.保護者は子どもの生活面(生活リズムや衣食住に関すること)に対して無関心または非協力的である	1.050	-0.431	1.059	2.381
* 3.保護者から子どものことをもっと分かってほしいと言われる	1.004	0.759	1.499	2.589
* 4.保護者が過保護で、子どもが依存し過ぎて、子どもの自立を妨げている	0.936	0.220	1.672	2.782
* 5.保護者との関係を重視するあまり、伝えたいことが的確に伝えられない	1.358	-0.106	1.047	2.133
6.家庭の状況にまで、教師は入り込めない	1.149	-0.324	1.231	2.368
*は採用した項目を示す				

表4 教員の職務関連Daily Hassles測定尺度の確認的因子分析結果(標準化係数)

教員の職務関連Daily Hassles (s: 児童関連項目 / p: 保護者関連項目)	【経験頻度】		【ストレス強度】	
	児童関連 Hassles	保護者関連 Hassles	児童関連 Hassles	保護者関連 Hassles
s1.授業中、児童が教室外に出て行く	.675†		.689†	
s2.授業中、児童が私語をする	.820		.906	
s3.授業中、児童が教科書を見るべき時に見なかったり、ノートに書くべき時に書かなかったりする	.833		.861	
s4.授業中、児童が机にうつ伏して寝る	.612		.712	
s6.始業の時間に着席できないなど、時間を守らない児童がいる	.777		.806	
s7.教師に対して、暴言や暴力をはたらく児童がいる	.780		.768	
s11.学級の児童が、(自分の)思い通りにいかないときに、児童同士で殴り合いのけんかをする	.656		.679	
s12.学級に悪ふざけやいたずらを面白がる雰囲気がある	.776		.836	
s16.児童が当番活動(給食・掃除・係活動など)を真面目にしない	.724		.763	
p1.保護者と話をしても噛み合わないことがある		.764†		.875†
p3.保護者から子どものことをもっと分かってほしいと言われる		.782		.747
p4.保護者が過保護で、子どもが依存し過ぎて、子どもの自立を妨げている		.518		.629
p5.保護者との関係を重視するあまり、伝えたいことが的確に伝えられない		.701		.744
(児童関連Hasslesと保護者関連Hasslesの)因子間相関	.479		.547	

※制約を課した箇所†を記している

経験頻度  $\chi^2=102.129$ ,  $df=41$ ,  $CFI=.972$ ,  $RMSEA=.054$  / ストレス強度  $\chi^2=74.112$ ,  $df=37$ ,  $CFI=.989$ ,  $RMSEA=.044$

時間に着席できないなど、時間を守らない児童がいる)、「14. 1~2名の落ち着きのない児童に周りの児童が誘発される」(対応する項目「12. 学級に悪ふざけやいたずらを面白がる雰囲気がある」)の計4項目を削除した。「保護者関連 Hassles」の識別力と困難度をみると、識別力が0.75を下回る項目はな

く、また困難度が絶対値4.0を上回る項目もなかったが、困難度が類似している「2. 保護者は子どもの生活面(生活リズムや衣食住に関すること)に対して無関心または非協力的である」「6. 家庭の状況にまで、教師は入り込めない」(対応する項目「5. 保護者との関係を重視するあまり、伝えたいことが的確

確に伝えられない)の2項目を削除した。

最終的に選定した「児童関連 Hassles」9項目、「保護者関連 Hassles」4項目の2因子斜交モデルのデータに対する適合性を検討したところ、経験頻度・ストレス強度ともに、良好な水準にあった(経験頻度： $\chi^2=102.129$ ,  $df=41$ ,  $CFI=0.972$ ,  $RMSEA=0.054$  / ストレス強度： $\chi^2=74.112$ ,  $df=37$ ,  $CFI=0.989$ ,  $RMSEA=0.044$ )。また、「児童関連 Hassles」と「保護者関連 Hassles」の要素間の相関関係(係数の値)は、経験頻度で0.479、ストレス強度で0.547となっていた。信頼性係数は、児童関連 Hassles(経験頻度)で0.864、保護者関連 Hassles(経験頻度)で0.705、児童関連 Hassles(ストレス強度)で0.887、保護者関連 Hassles(ストレス強度)で0.766と、良好な水準にあった。なお、各要素の合計得点の平均は、児童関連 Hassles(経験頻度)で6.9(標準偏差5.1、範囲0～23)、保護者関連 Hassles(経験頻度)で2.9(標準偏差2.3、範囲0～12)、児童関連 Hassles(ストレス強度)で5.8(標準偏差5.4、範囲0～25)、保護者関連 Hassles(ストレス強度)で2.9(標準偏差2.7、範囲0～12)となっていた。

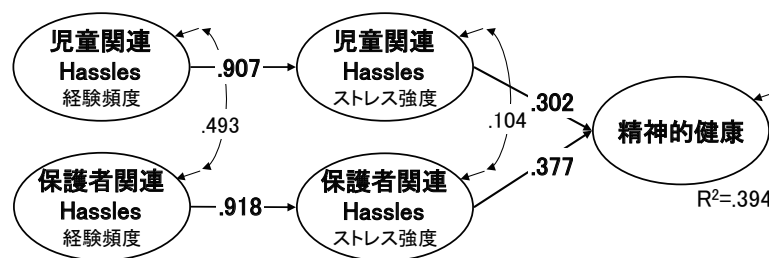
### (3) 教員の職務関連 Daily Hassles と精神的健康との関連性 (図1)

関連性の検討の前に、精神的健康の12項目1因子モデルのデータに対する適合性を検討した結果、適合度は許容できる範囲にあった( $\chi^2=146.288$ ,  $df=32$ ,  $CFI=0.950$ ,  $RMSEA=0.083$ )。また信頼性係数は0.866と良好な数値を示した。精神的健康の合計得点をみると、平均2.4(標準偏差3.0、範囲0～12)であり、さらに2点と3点の間にカットオフポイントを設定すると<sup>21)</sup>、189人(36.6%)の教員の精神的健康状態が不良であることが示された。

最終的に選定した項目で構成する教員の職務関連 Daily Hassles と精神的健康との関連性を検討したところ、まず仮定した因果関係モデルのデータに対する適合性は、 $\chi^2=280.140$ ,  $df=142$ ,  $CFI=0.981$ ,  $RMSEA=0.043$ と良好な値を示した。変数間の関連性に着目すると、児童関連および保護者関連 Hassles の経験頻度は、対応するストレス強度に対し、有意な・強い正の関連性を示した(標準化係数は順に0.907、0.918)。さらにそれらストレス強度は精神的健康に対して、児童関連 Hassles は0.302、保護者関連 Hassles は0.377と有意な正の関連性を示した。具体的には、児童の問題行動や、学級がうまく機能しない状況を頻回に経験するほど、また保護者への対応について苦慮する場面に多く遭遇するほど、それらに対するストレスを強く感じ、精神的健康の悪化につながる、という結果であった。なお統制変数に関して、児童関連 Hassles(経験頻度)に対しては「現任教着任後期間」(標準化係数-0.132)、「担任学年」(0.128)が、保護者関連 Hassles(経験頻度)に対しては「現任教着任後期間」(-0.144)が、児童ならびに保護者関連 Hassles(ストレス強度)に対しては「性別」(順に0.074、0.066)が、精神的健康に対しては「担任学年」(0.123)が有意な関連性を示していた。このモデルにおける精神的健康の説明率は、39.4%であった。

### IV. 考察

本研究は、最近、社会問題となっている教員のメンタルヘルスに対する有効な支援策の検討を視野に入れ、特に学級担任制をとり問題を抱え込みやすい小学校学級担任を対象に、教員が日常的に経験している苛立ち事(Daily Hassles: ストレスの素因となる出来事、困りごと)を測定する尺度の開発を目的



$n=516$ ,  $\chi^2=280.140$ ,  $df=142$ ,  $CFI=0.981$ ,  $RMSEA=0.043$

※潜在変数に付随する観測変数(項目)および誤差は省略  
統制変数…(教員の)「性別」「年齢」「教職期間」「現任教着任後期間」「担任学年」「全校の学級数」

図1 教員の職務関連Daily Hasslesと精神的健康との関連性

とした。

本研究では、第一に、教員の職務関連 Daily Hassles を測定する項目を、項目反応理論により検討した。探索的因子分析等を測定尺度の開発に適用する場合、回答頻度の偏り、項目間相関係数などからの項目選定はサンプルの特性に依存するといった限界点が拭えないが、項目反応理論ではサンプルの影響をほとんど受けず、さらに次元連続性を備えた尺度項目を選定することができる<sup>29)</sup>。つまり、尺度得点が個人の特性をそのまま反映する尺度開発が可能である。本研究では、この方法を用いて項目を選定した。

第二に、因子構造モデルの側面からみた構成概念妥当性を構造方程式モデリングで検討した。結果はあらかじめ仮定した因子構造モデルのデータに対する適合性は良好であり、また測定項目のクロンバックの $\alpha$ 信頼性係数も良好な数値を示していた。このことは、本尺度の因子構造モデルの側面からみた構成概念妥当性と内的整合性の側面からみた信頼性が支持されたことを意味している。

第三に、従来、ストレスが原因で悪化していると言われている教員のメンタルヘルス（精神的健康）を外的基準とする開発した測定尺度の構成概念妥当性を検討した。具体的には、選定した項目群で測定した職務関連 Daily Hassles との関連性を検討したところ、児童ならびに保護者関連 Hassles に対するストレスと精神的健康の間に有意な正の関連性が示された。この結果は、授業中の児童の私語や、学級内のいたづらを面白がる雰囲気など生徒指導に関連する困りごと、また保護者と話が噛み合わないなど保護者への対応に関連する困りごとに対してストレスを強く感じるほど、教員の精神的健康が悪化・不良状態にあることを示している。またそのパス係数をみると、児童関連 Hassles と比べて、保護者関連 Hassles のストレス強度の方が精神的健康に対する影響度が大きくなっていた。従来の研究において、関山（2008）はストレス反応を従属変数とした重回帰分析で、職場におけるストレスの認知の影響を「子どもたちと接する場面」「保護者や地域の人々と接する場面」「教師同士で接する場面」の3場面から検討しているが、子どもたちと接する場面の影響度（標準偏回帰係数）は-0.13、保護者や地域の人々と接する場面では-0.16と報告しており<sup>30)</sup>、本研究の結果は概ねこの知見を支持するものと

言える。さらに本研究では、 $0.302 \cdot 0.377$ と先の知見に比べてその影響度が大きくなっているが、これにはふたつの理由が考えられる。ひとつは、本研究において教員のストレスを Lazarus のストレス認知理論<sup>31)</sup>に基づき、ストレス源（ストレッサー）とそれに対するストレス認知の二つで捉えたためである。Lazarus ら（1984）は、ライフイベント（人生における大きな出来事：身近な人の死や、離別、失業など）よりも、日常生活における些細な苛立ち事（daily hassles）を長期間経験し、それが蓄積することの方が、個人の心身に影響を及ぼすと指摘している<sup>31)</sup>。本研究では、この指摘も考慮し、教員が日々の職務上経験すると推察される出来事の頻度と、さらにそれに対するストレスを測定することにより、小さな困りごと・悩みの蓄積が教員の精神的健康状態を悪化させることを証明できた。もうひとつは、項目反応理論を用いたことにより、以前であれば同じ得点でも実際の個人の状態にはバラツキが存在していたものと考えられるが、前述したように、尺度得点が個人の特性をより反映するように尺度項目を選定したため、尺度の精度が高まったことが挙げられる。

なお、統制変数に着目すると、女性教員は男性教員に比して、児童および保護者関連 Hassles に対してストレスを強く感じることを示された。その影響度はあまり大きくないものの、後藤ら（2001）が女性教員は家事・育児など社会から期待される女性の役割に起因する多忙さ・社会から受ける否定感がある、と述べているように<sup>25)</sup>、女性教員には特有のストレスがあることを考慮に入れ、職場の同僚の性比が偏り過ぎないような人員配置や、寛容な職場風土作りが求められる。また、現任校着任後期間が長い教員ほど児童および保護者関連 Hassles の経験頻度が低いこと、高学年を担当している教員ほど児童関連 Hassles を頻回に経験し、精神的健康が悪化していることが示された。このことから、高学年のクラスは、着任後期間が長い教員を担当にする、もしくは着任後期間が短い教員にはベテラン教員によるサポート体制を整える等の配慮が求められる。

以上、本研究では、小学校の学級担任を対象に、彼らが日々経験している「職務関連 Daily Hassles」を測定する尺度を開発した。今後は、本尺度を用いた教員のストレスと教員自身が持つ内的・外的資源との関連性を明らかにし、ストレスさらには精神的

健康の悪化を防ぐための有効な支援・予防策について、具体的に検討していくことが望まれる。

**付記** 調査にあたりご協力を賜りました各小学校の学級担任の皆様、ならびに関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

### 参考文献

- 1) 文部科学省 (2012). 教員のメンタルヘルスの現状.
- 2) 文部科学省 (2012). 教職員のメンタルヘルス対策について.
- 3) 文部科学省 (2009). 平成20年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について.
- 4) 鈴木邦治 (1993). 教師の勤務構造とストレス：ストレスの認知的評価を中心に. 日本教育経営学会紀要、35、69-82.
- 5) 高木亮 (2001). 教師の職務ストレスから見た学校改善に関する研究. 日本教育経営学会紀要、43、66-78.
- 6) 末田恵子、大石英史 (2003). 今の現場教員は何にストレスを感じているか？：アンケート調査を踏まえて. 研究論叢 (芸術・体育・教育・心理)、53 (3)、23-33.
- 7) 高木亮、田中宏二 (2003). 教師の職業ストレスに関する研究－教師の職業ストレスとバーンアウトの関係を中心に－. 教育心理学研究、51、165-174.
- 8) 田中輝美、杉江征、勝倉孝治 (2003). 教師用ストレス尺度の開発. Tsukuba Psychological Research、25、141-148.
- 9) 森慶輔 (2004). 中学校教員の学校ストレスとストレス反応の関係：相談を持ちかけやすい先生はストレスが少ないのか. 日本教育心理学会総会発表論文集、46、107.
- 10) 杉若弘子、伊藤佳代子 (2004). 小・中学校教員のストレス経験：尺度の開発と現状分析. 奈良教育大学紀要 (人文・社会科学)、53 (1)、55-62.
- 11) 斉藤浩一 (2004). 中学校教師ストレスの構造的循環に関する実証的研究. 東京情報大学研究論集、8 (1)、21-28.
- 12) 竹村洋子 (2008). 「問題行動」を示す児童とのかかわりに対する教師の評価に関する検討. 教育心理学研究、56、44-56.
- 13) 石山陽子、坂口守男 (2009). 教員の職場内メンタルヘルスに関する報告 (I)－離職・病気休職者からの聞きとり調査をもとに－. 大阪教育大学紀要 (第Ⅲ部門)、57 (2)、59-68.
- 14) 塚本伸一 (2010). 教師ストレス尺度作成の試み. Rikkyo Clinical Psychology Research、4、1-9.
- 15) 森脇由梨子、松田修 (2011). 中学校教師用ストレス尺度の開発と検討. 東京学芸大学紀要 (総合教育科学系)、62 (1)、189-196.
- 16) 文部科学省 (2012). 学校及び教員を取り巻く状況に関する参考資料.
- 17) 関山徹、園屋高志 (2005). 小学校教師におけるサポート資源の利用と心理的ストレスとの関連. 鹿児島大学教育学部研究紀要 (教育科学編)、56、207-218.
- 18) 森慶輔、三浦香苗 (2005). ソーシャルサポートの効果についての探索的研究 (2)－公立小・中学校教員の自由記述の分析をもとに－. Annual Bulletin of Institute of Psychological Studies、8、58-67.
- 19) 高木亮、淵上克義、田中宏二 (2008). 教師の職務葛藤とキャリア適応力が教師のストレス反応に与える影響の検討. 教育心理学研究、56、230-242.
- 20) 西田順一、大友智 (2010). 小・中学校教員のメンタルヘルスに及ぼす運動・身体活動の影響－個人的特性およびストレス経験を考慮した検討－. 教育心理学研究、58、285-297.
- 21) 福西勇夫 (1990). 日本版 General Health Questionnaire (GHQ) の cut-off point. 心理臨床、3 (3)、228-234.
- 22) Reckase M D (1979). Unifactor latent trait models applied to multifactor tests: Results and implications. Journal of Educational Statistics、4、207-230.
- 23) Roznowski M (1989). Examination of the measurement properties of the job descriptive index with experimental items, Journal of Applied Psychology、74、805-814.
- 24) 熊谷龍一 (2009). 初学者向けの項目反応理論分析プログラム EasyEstimation シリーズの開発. 日本テスト学会誌、5、107-118.



- 25) 後藤靖宏、田中妙 (2001). 女性教師のストレスの特徴 - 小学校・中学校の場合 -. 大分大学教育福祉科学部研究紀要、23 (1)、127-136.
- 26) 高木亮 (2010). 都道府県ごとの教師の精神疾患を原因とした病気休職「発生率」のデータ報告Ⅱ - 平成19年度のデータを中心に -. 中国学園紀要、9、73-80.
- 27) 朝野熙彦、鈴木督久、小島隆矢 (2005). 入門 共分散構造分析の実際. 講談社サイエンティフィク.
- 28) 山本嘉一郎、小野寺孝義 (2002). Amos による共分散構造分析と解析事例. 第2版. ナカニシヤ出版.
- 29) 酒井恵子、山口陽弘 (1997). 順序性のある特徴集合としての価値志向性尺度 - 一次元的階層性の集合論的解釈 -. 東京大学大学院教育学研究科紀要、37、217-230.
- 30) 関山徹 (2008). 小学校教師における心理的ストレス過程. 鹿児島大学教育学部研究紀要 (人文・社会科学編)、60、309-319.
- 31) Lazarus R S, Folkman S (1984). Stress, appraisal and coping. New York : Springer.

## Development of the Daily Hassles Scale for Elementary School Homeroom Teachers' Class-Management

KIYOMI ANDO\*, NOZOMI NAKASHIMA\*\*, YOUNG-JO CHUNG\*\*,  
KAZUO NAKAJIMA\*\*\*

*\*Department of Medical Welfare, Faculty of Medical Welfare, Kawasaki University of Medical Welfare, 288 Matsushima, Kurashiki-shi, Okayama, 701-0193, Japan.*

*\*\*Graduate school of Health and Welfare Science, Okayama Prefectural University, 111 Kuboki, Soja-shi, Okayama, 719-1197, Japan.*

*\*\*\*Department of Health and Welfare, Faculty of Health and Welfare Science, Okayama Prefectural University.*

### Abstract

The purpose of this research was to develop the Daily Hassles Scale for elementary school homeroom teachers' class-management. We conducted a survey on 663 regular homeroom teachers of public elementary schools in A prefecture. We examined the content validity of the questionnaire by means of item response theory. We also examined its construct validity in a relation with the factor structure and the external criterion by means of SEM, and its reliability which paid its attention to inner consistency. The validity and reliability of "Daily Hassles Scale for Class-Management" which we composed of 9 items for students' affairs and 4 items for parents' affairs were good enough. These findings suggested that using this hassles scale may be useful for examination of the relationship between teachers' stress and their internal/external resources and the effective support to maintain teachers' mental health.

**Keywords** : homeroom teacher, stress, mental health, structural equation modeling, item response theory